232
登録番号 413

兒女

近江八景乃和歌

頭書源氏講釋入

源氏物語繪盡大意抄

重寶

溪齋英泉画

書肆甘泉堂梓

抑此源氏物語は光源氏の君の事我先なる寸放に歌号とせ。此君を光といふるは桐壺の巻に七夜の清年に学問はじめしゆゑより。糸竹のコゼにも秀ぬひ行るも世の人にはしとなりぬふ。其以言羅より博士渡りて此君を捌し来らずに彼はらせ此君の光りおぼゆきごとくうつくしくなりしゆゑにめでて光君となづきをりしよりあくは中をしに。源氏は嵯峨帝の御子に源の姓を給しに始るに物とは万物の義に。其万物の理を実に演説を語るといふに。一条院の后の宮上東門院へ珍しきやうなるや侍るとなげ申さぬべば。紫式部にあらせられて書しむる所に。其上より式部は石山寺にありて此事我親世なるに祈りしにをりしも八月十五夜の月湖水にうつりたるなのまさにわたるまゝにまづ須磨あらしのふこはれをはしりそめしよりあるさまは紫式部は此觀世音菩薩の化身なりといひ傳へるなり

部門 國文
函数
番号 154
矢野藏書

比良春雪
堅田落雁
矢橋帰帆

唐崎夜雨
三井晩鐘
粟津晴嵐
勢田夕照

此源氏物語の事ハ往古より貴賤となく人々の好める事他書に越たり。さまバ此道の先達心切に。さぬぐなる註解を加へたる書籍牛に汗し揀ず充に不堪其志しあるものといへども其本文ども讀得る事かたく又讀えたりとて解せるも亦かたし。ましてや故人の註釋せる。河海明星孟津。岷江辨弓萬水湖月の類巻數多き大部の品ハ更なり。いハぞ十帖をきる源氏番の囀り。紹巴抄忍草等にて間に合せさへまたかたくをきるべき者かろ〳〵しく一覽するもたゆまそうら所バ。五十四帖の繪を写し画上に一首ずつたをあけて。児童の眼にふまるバ聊物語のゆゑよしを志るゑもよりなんとす

天保丁酉の冬再版

李園主人志る浜

此源氏ものがたりの事ハいろ〳〵なる説むかしよりもくなからぬ河海抄の説にハ此の宮左大臣高明公安和二年ごぎいの權のそれに左せんせられたるハ後式部をさるき時よりなまたそまつりて思ひなげきたるあろ大齋院より上東門院へめづらかなる菓子や侍るとこゝろ中させなひたるにうつが

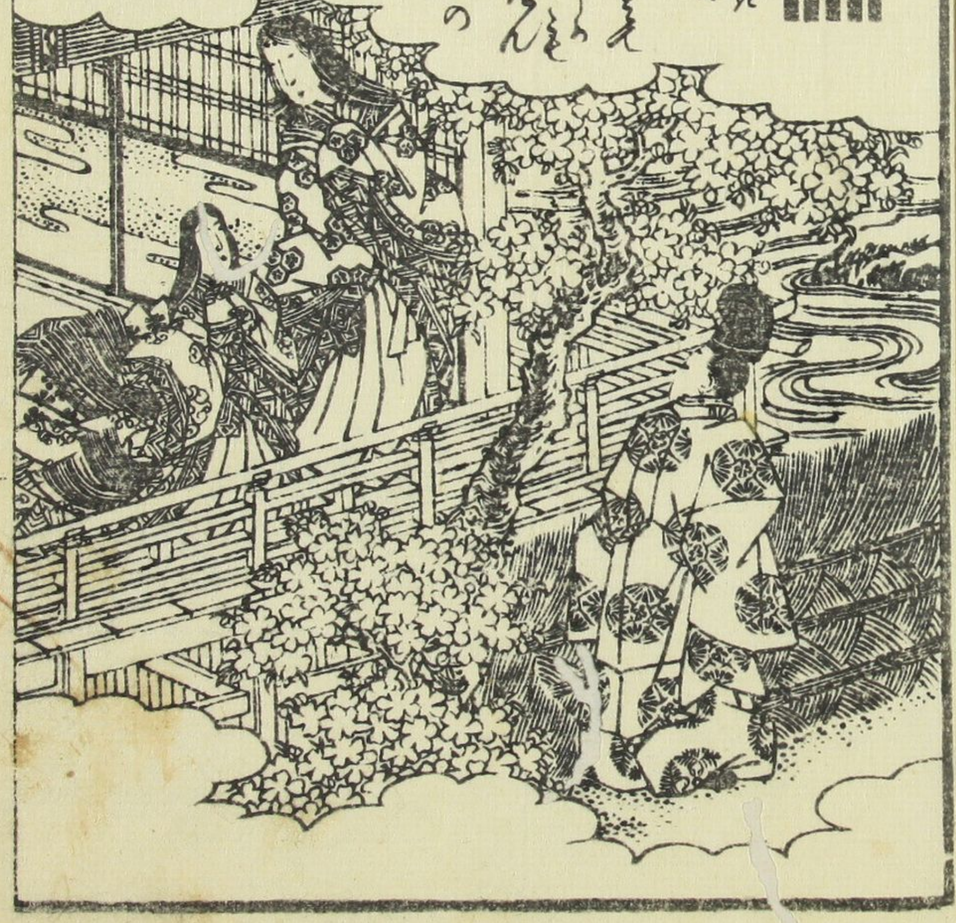
ぬけとり世うのふ
る程ものの語りハ月
なまさくおりしろか
らぬ人々の耳目を
おどろかしたるどのる
どもをあくらしく
はくりまゐけてな
てまろるべきよし我
式部に作せらまし
けまバもなかち石
山寺に通ひしも
此事をいのりゆに
拵しも八月十五歳
の月湖水にうつり
[illegible]

語の一番ハ空にてり
そひてむまにうぶ
るをうとまれ先
にとて佛前にあり
ける大般若のねうし
をかぞ号にゆうけ
てまづ須ヂ明石の
ふたまれをかれとゞめ
たりさまバ須ヂの
巻にとゝひ八十五歳
なりなりとおぼし
いでとうれしとうや
年後ぞとまちてざい
志ゆうさんげのため
大般若経一部六百
巻をとゞうかき

うつして女房にけ
ゞ今ふ石山ちふわり
との光源氏を九大
臣ふうぞく家のよを
まきふがうみ月よ
そく周公旦白居
易のふー（をんゞ在納言菅丞相
のよーをうつしたるかきやうなり
そまとり次第ふ九
くゝ五十四帖ふ
うーくまりーを
権大納言行成ふ清
書せさせまて秘蔵
ふまふもの

夕顔
よりくこそ
そまとも
ふめ
ふれよ
そのぐ
こまる
花の
夕ぐれ

法感ちの人々関白奥
書を加へらまそいつく
式部ふ世ふ皆式部が
作とのこゝりより光比
丘尼を加へる所より
とこゝ
誠ふ君父のまでより
仁義の道好久の勝善
悪の報ふいつまでよ
旦をのせばといふる
ふー
そのかもまこ荘子の
寓言ふをとーまきの
ふりあそびのよう老
まきふひるあそー一部
の中ふ式ふの上のふを



若紫
ふふつまそ
いつしをうん
もうまきの
物ふ
ふけるゞ
ゝ
ゝ
ゝ

すはあらしの夜巻を
八月十五夜の月淵水に
うつりて物語の遊び
室にうらぶるを見すれば
さ花にと佛前の經
文をひるがへしてかける
との儀ハ実なきとて
用ひざるとなり
大般若經一部を書
て奉納社義ハさも
あべしと云々
須磨の巻に源氏の
させんの事をかれる
ハ西の宮の左大臣
言明公云々
此説信じがたしその

紅葉賀

ゆゑハ此物がたりハ寛弘のはじめにつくるといへり冷泉院の安和二年より寛弘元年まで三十六年なり故式部初少よりなほとそゆゑりて思ひなげきたる頃なほバとあほバ八十年にもおよぶ奄し

紫式部日記ハ寛弘六年の記なほバ八十八歳なりなるに後宣孝に嫁して大武の三位をうむべきね遠いらん

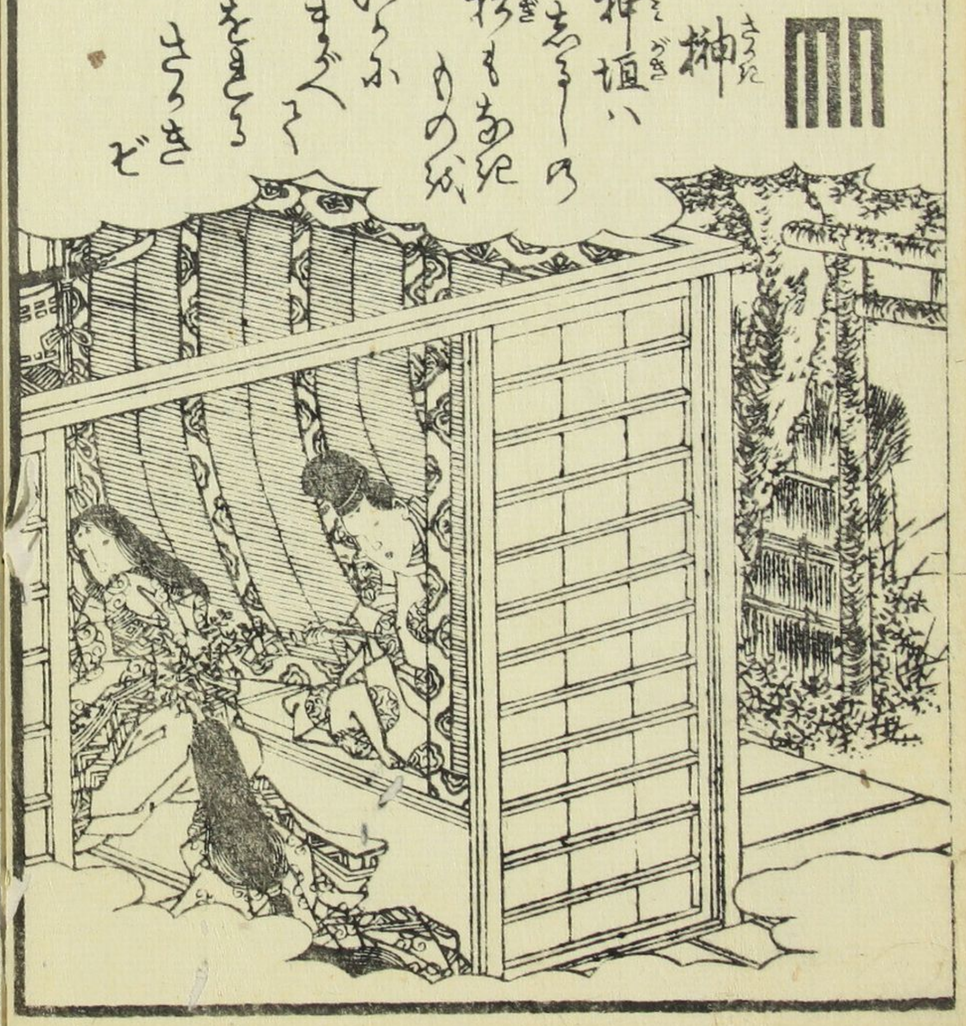
又云定家の詞に歌ハはるなくよむものとありてそのなりハ何のつゝしもなしといへり古今蜜動に見えたり

なほ歌乃に おいてハまことのなるひなるべし

たりほバ此物語をみるにも大意をなぞらへてみるべし

式部が此物がたりをかくに人をひきてなしくせんとハ思ふ事じ名ほどまた男女にて一部の始終好

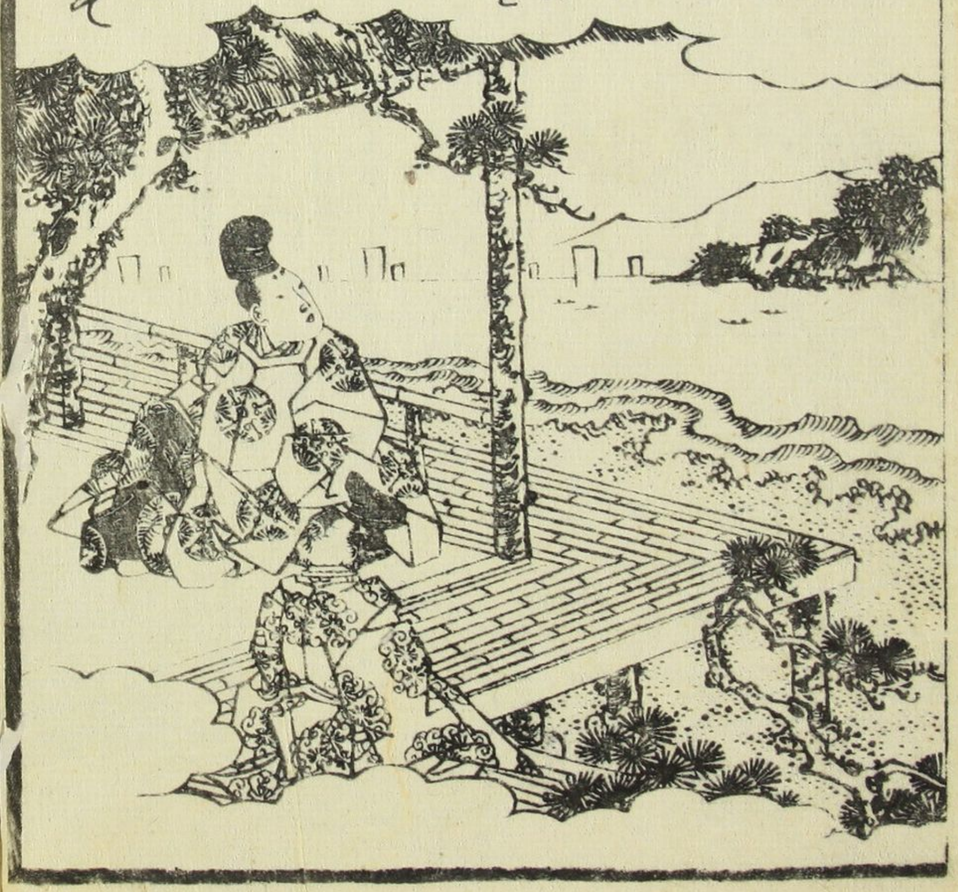
久について君にそんぜらるゝ人もあるべし
又聖主賢臣なるゞに
なぞらへてくらける所
に叶はざして罪を元
とまじにや地獄にハ
入るなり源氏の薄
雲に事ありしハ父
に付くいハゞ又何の
乃ぞ匂兵部卿の浮
舟におしたちなる
朋友に付て何の乃ぞ
夕雲雲のふたりハ
ともにまゝ人に似た
まどタぎりハ落葉の
宮におしたちなる柏



本の是に絃なるゝをるの
宰治の中君の匂兵
部卿の宮にむかひまし
ての後さびくなるハぶ
ましも罪をくなるら
ぞ春秋の褒貶ハ君
人の君の悪人の悪行
を面々に志すしてあ
まハよしらまハおし
しとつなせてまゞあそ
勧君懲悪あきらか
なまた此物語ハ一人の上
に君悪あひまじハまる
事を志なり何ぞあ
まを春秋に比せん
此物語を作まる時代の

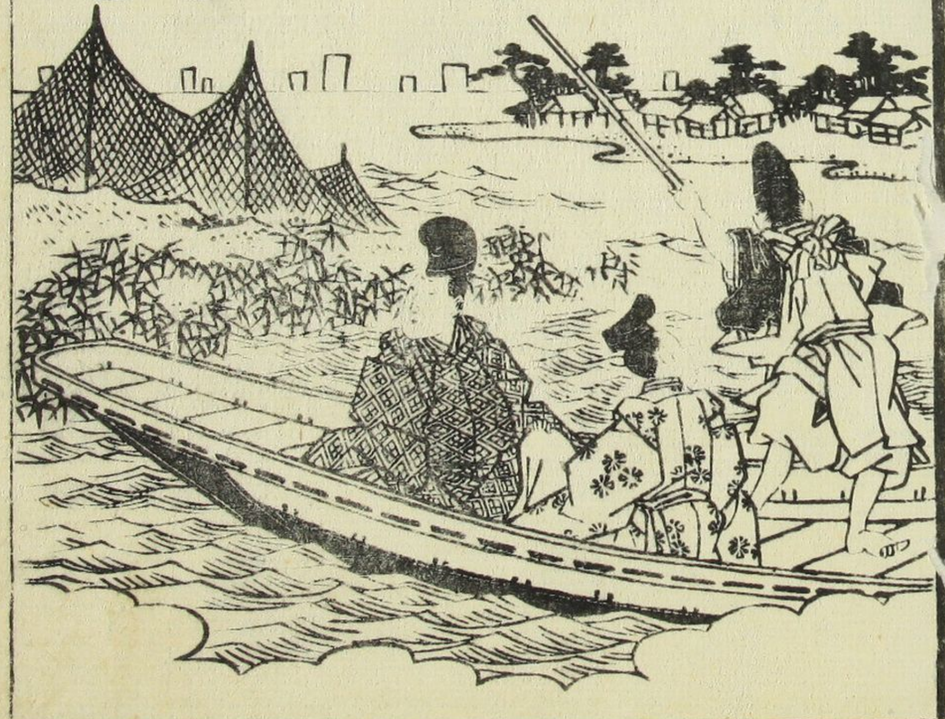
事万水一嘉に云醍醐
朱雀村上氏三代に准
ずるなり さまでは桐壺
のみうどをば延喜朱雀
をば天慶。冷泉院をば天
暦に比し替り光源氏
の君をば延喜の御子西
の宮の左大臣高明公
に比するなり周公且
東征夏丞相在納言の
ことしを思ひ又光君
放壺の女御密通の事
は在原の羽林二条の后
に密通の儀相似たる
に准ずるなり
源氏は朱雀院冷泉院

須磨
宮紀めかる
いせをの
あまをも
おもひ
ものしか
たるてふ
すまの
浦にて



なるべき書たるに云ふべく
て宇多の天皇より
始まれいふはこれなり
のことなり此説なり
さて一条院の御時の
さまをあらはさば
いひなしたるものと
思ふべし
此物語作者の事
宮治大納言物語に
曰今はむかし載なの
守為時とてざえ有
る世に世さしかり
なる人は紫式をさぶが
おやなり此為時源
氏は作りたるなりと

明石
秋の
秋の
浦きぶけ
れ
こなよ
ゆがこなる
雲井を
かけも
宮紀の
まもも
つんん



まうなることゝ云を
むもめ志きぶ行ふ
書せたりとぞ云々
茂原菓冬公の世讀
問答の跋に云班麗
が史記を班固がかき
つぎ此に式部が源氏
物語に大部二位が
宇治十帖をそへ侍
りしなりのあるなり
に云々
源義辨引抄行云
三光院の御説に云
宇治十帖ハ大部三位
が筆といふ説ニ是成
用ひぞ文章の藤に

ゐるなりハ此に式部と
ざと文辨をかきて人
に書たるなりも故ハ
帝ハ四代目年月六
十八年の後なるべ
人の詞づかひも志しぞ
してかゝりもてゆく
世上のならひなるを
思ひとりてありく
と其代になりたる
いきおひを文章に
あらはしたり云々
此物語発記の説さ
まべあり為時が作
紫式部が作いづれ
も分明ならぬ皆一

定して信しがたし
云々
此物語説本一世ゟ
あらざるゟ河海
抄孟津抄等ニ云
行成ハ自筆の本
もとゞく今世ニ
清ならぬ源の光
行ハ八本を以て校
合取捨して家本
とせりいハゆる
二条帥ノ伊房本
冷泉中納言朝隆本
堀河左大臣俊房本
黄表紙といふ
左大臣の筆跡

従一位羅子本
土御門右大臣女
京極北政所
法成寺関白本
尚侍版本といふ
又条三位俊成本
京極中納言定家本
青表紙といふ
おのゝ説本といへ
とも皆異同あり経
古写本をかんがへ合
せて且て見を加ふ
べきものゝ呂ものハ
おもふ従ふ古今の
英言なり
河内本ハ河内のち

大監物源の光行
八の本を以て校合
取捨して家の本
とせしとて河内
本とよべり
紹巴抄に云ふ此ものの
ぐたりに本の美矣
あり定家卿御自
筆の青表紙中
頃ごんぜつのやう
なりしかれハ河内
の守光行源氏抄
語をとりつきめて
あそハさまてしまて
河内本と世にいひ
なしハせり

松風
舟を
うへて
むとり
うへまる
ゆる
さとに
きしに
にてる
海川
かぜぞ
ゆく

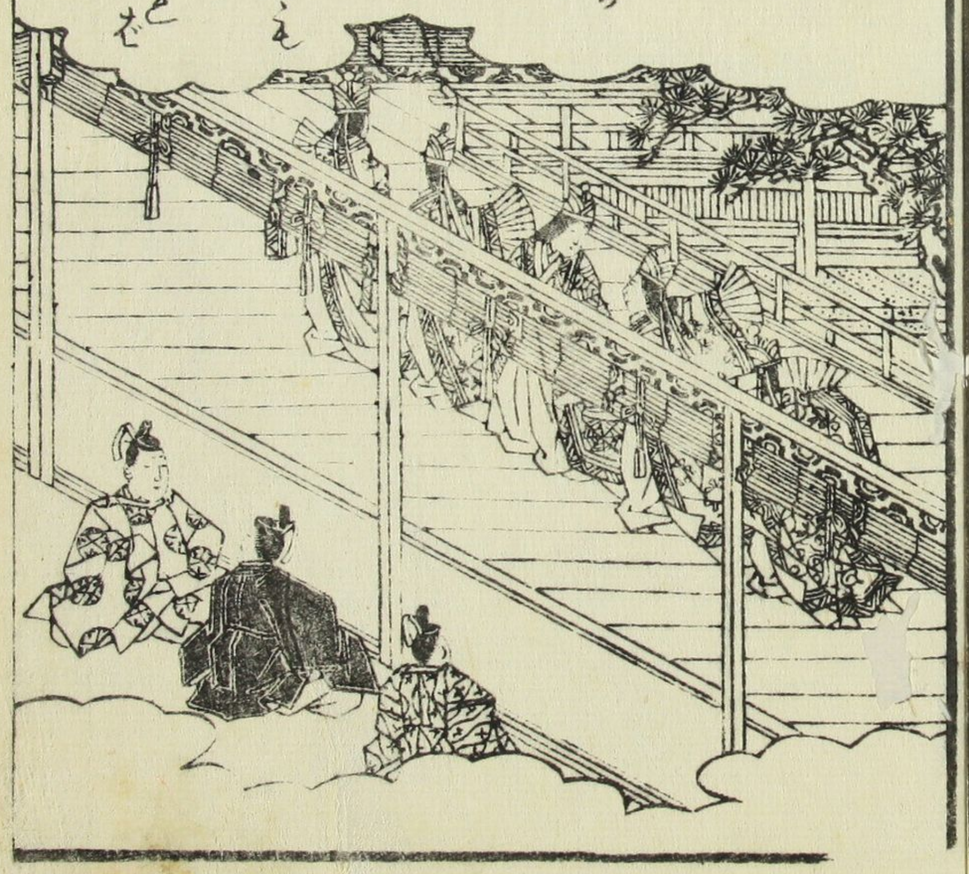
耕雲老人河内本
を信じて知れがこ
き所々をなれさま
しなを用ひなふ
云々
宗祇定家卿の語
なをゆうしく思ハ
まて志多良とい
ひし人にあひ中
さま青表紙傳
受しこのち頼い
ぶりしきところを
一条禪閤の御所へ
きハめて三条西殿
へかう志ゆく中さるく
といへども禁中の

薄雲
いりひさし
こ稱に
なるびく
う可雲ハ
そのねまに
袖をし
いろや
海が
へる

ふるきてるすハ逍遙
院後へたづ田中さ
まし事とあり
云々
辭引抄に云京極
中納言定家の
本青表紙と号し
宗祇用ひて今に
るふ也一華堂乘
阿云定家の青表
紙を周防の國の
守ゆく一覧せり
外題ハ青表紙に
定家のうちつけ
がきなり百四代後
土御門の院宸筆

朝顔（あさがお）

ふるきてるすハ逍遙
院後へたづ田中さ
まし事とあり
云々
辭引抄に云京極
中納言定家の
本青表紙と号し
宗祇用ひて今に
るふ也一華堂乘
阿云定家の青表
紙を周防の國の
守ゆく一覧せり
外題ハ青表紙に
定家のうちつけ
がきなり百四代後
土御門の院宸筆



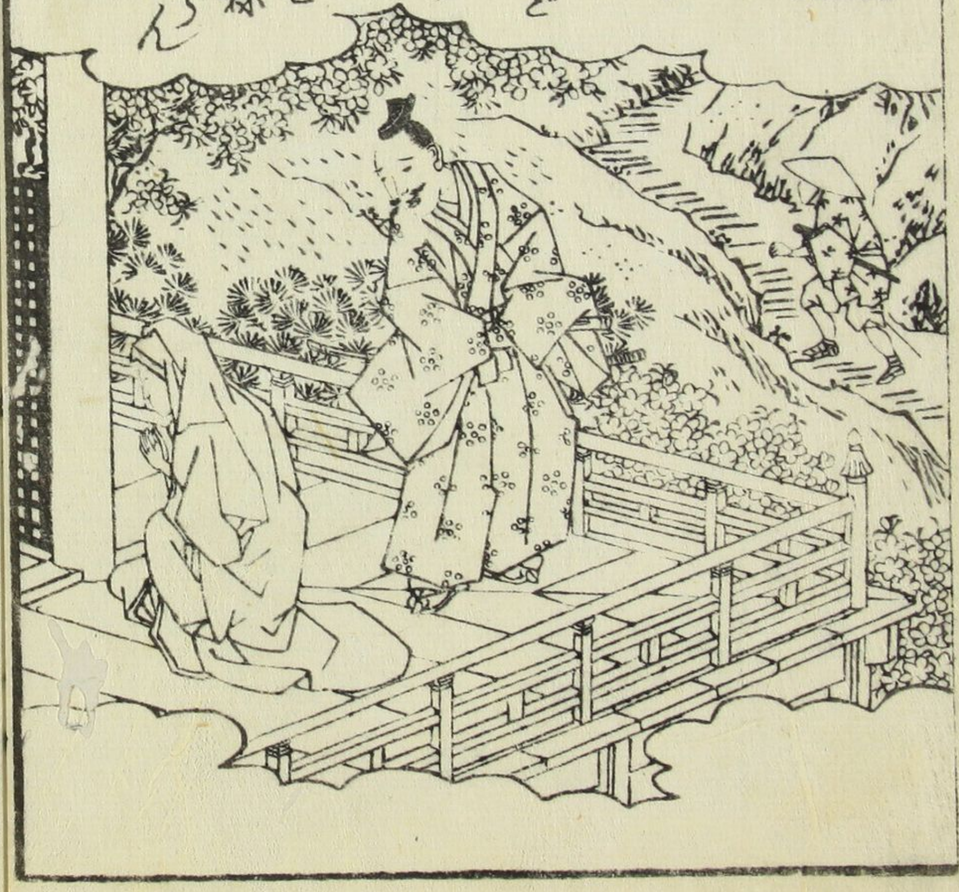
小てげでいをまん
中におしなべり
今世に源氏の外
題をまん中にする
事ハこれを例と
せり定家の自筆
桐壺苑の宴携姫
の三冊之余ハ後成
のむすめなどの
筆之水尾づくしの
巻うせてるを逍遙
院かきたしぬべり
云々
宗文要領に云河内
本青表紙とて此
物語二本にはらる

乙女（をとめ）

をとめ
子が
神さび
ぬらし
あまん
そで
ぬるき
よのとも
とらひ
夏ぬるを

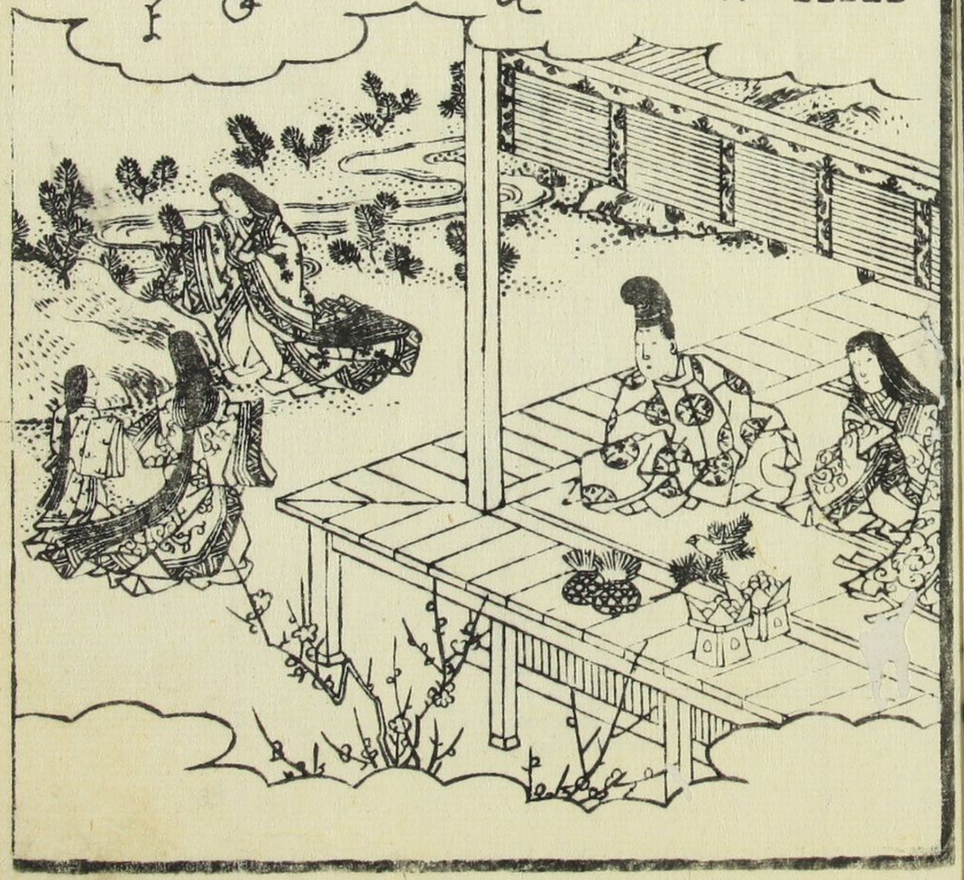
とりといふ近代の
先達とする青表紙
をもちひらるゝなり
よりて此事を考る
に今ハ二本の差別
なし大かた今世に
傳るハ青表紙のこ
とゝ心えたり予此
ものがたりをふるく
好むによりてさのつ
こゝろよりなるかを
考へしに家々の
藏なるなどをもて
此事ゝたりしかども
是ハ河内なこと
青表紙と全篇に

玉葛



なりてゐるハこゝにそのう
ちまことのたがひハあまたもあれ
大抵先達の青表紙といへるなり
中に河内なといふ
こゝにより云ふ例の
あるなもあまたも
全篇ハ悉からぬこと
バ河内なハ多く世に
ふるせぼとゝえたり
此事粉さぬるなるべし
しくかまことに不つ死
てさぶ[illegible]しらるもた
しらに河内なをえ
る人もなし近き

初音

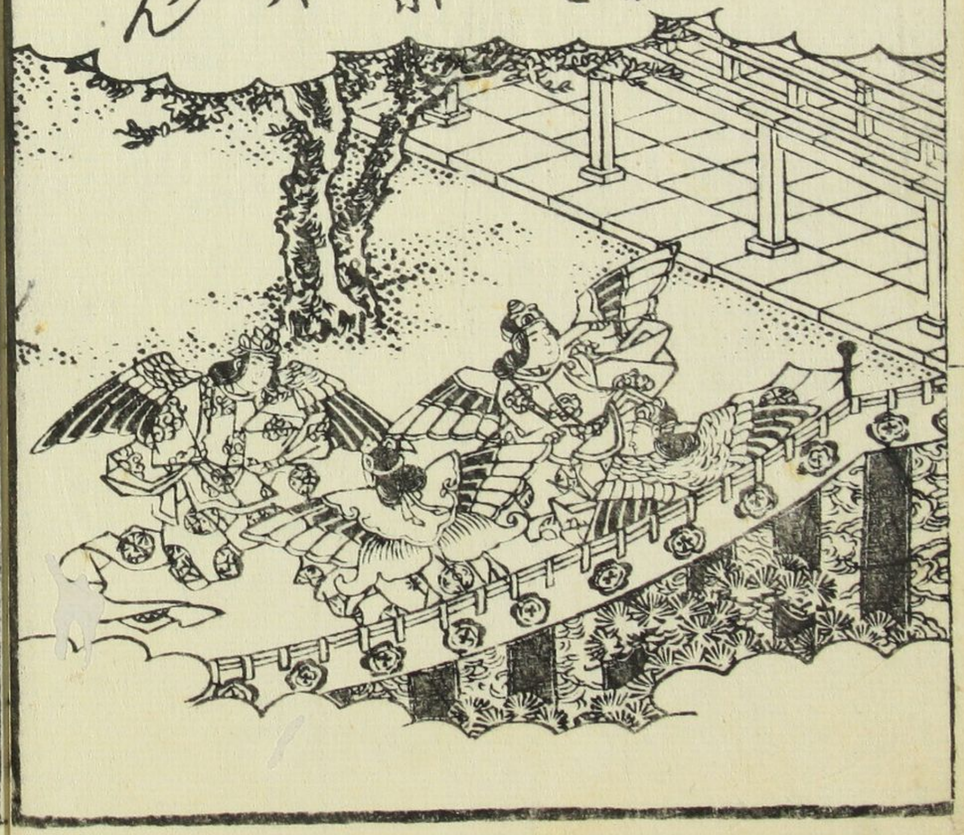


雲し月を
まつに
ひらまてと
ふるに
けふ
鶯の
なけ[illegible]
きゝ
せよ

世の抄抱ふとけさ
いつゝハ古抄ふあへる
を引さくいふ之今又
おとゝぶとてゝ多なか
のうちにてひ河内
ふもあ是青表紙ふ
もあ是よきを用ひ
あしきをのぞ給さ
ゝるべきなり之まべさ
ゝなものかたり今の
世ふ作ゝるとあろハ
いづ是も作写のあや
まりゝなづかひのち
がひ脱落誤等多く
してさとしがたき
所多きふ此ものが

胡蝶（こてふ）

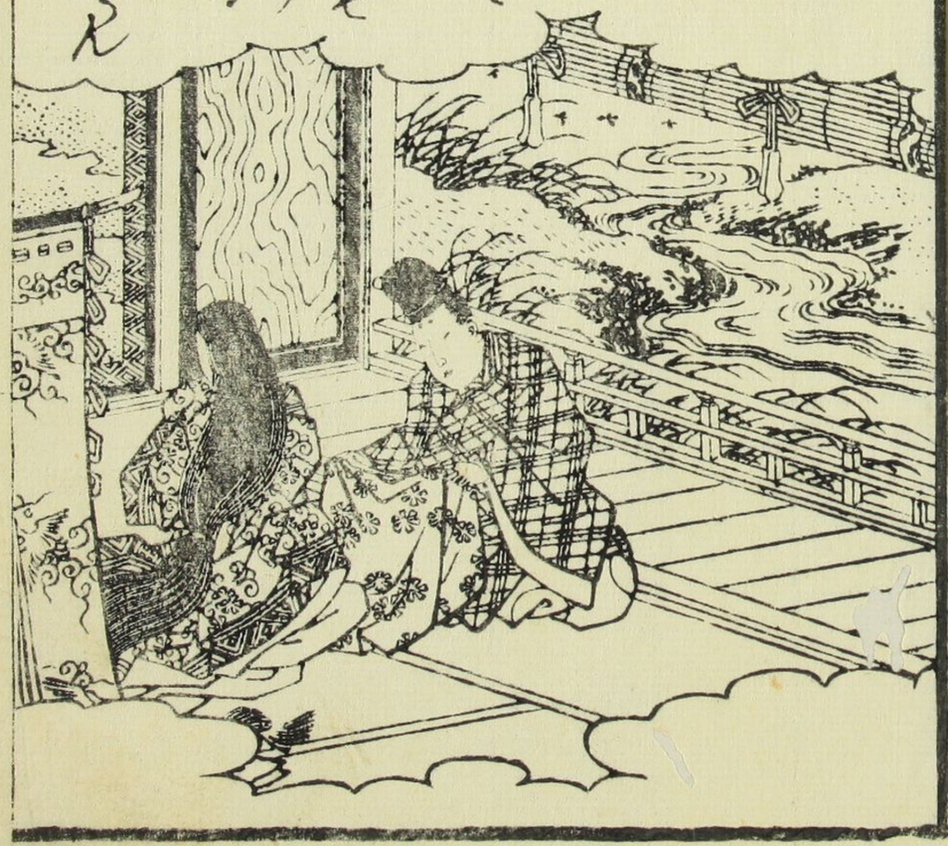
花ぞの君
あてふを
さへや
志たくさふ
妹（あね）まれ
むしハ
うとく
見るらん



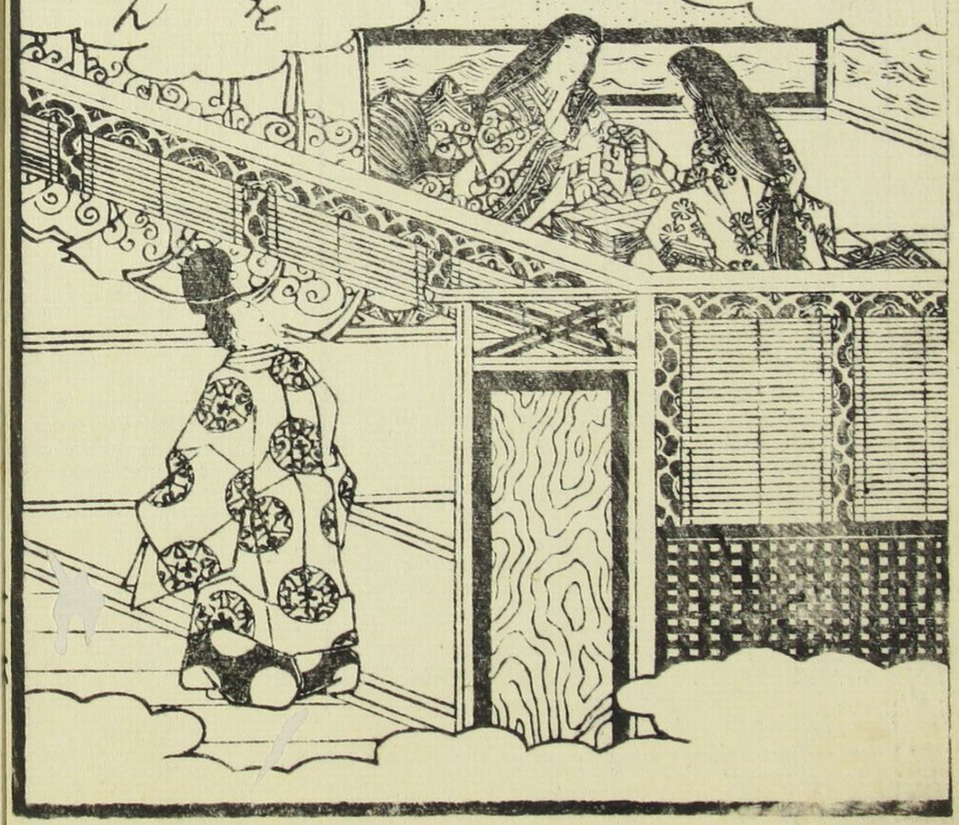
たりハ系極黄門を
たゞめ世々の先達
心をつくし深くもて
あそバ是て貴賤他
書ふことなるゆ系ふ
諸なとものふあ要り
もくなくして若な
多しさいハひ了武
朝が聞きをのとして
そのもとをうしなハ
ざるゆあふぐべし
よろこぶべし
更科の記ふ云あ孫
まゝたゝなど其の
人々のその物がたり
うのものがたり光源

螢（ほたる）

都ハ
せで
身を
のゝ
あがも
ほたる
こそ
いふより
まさる
おもひ
なるらん

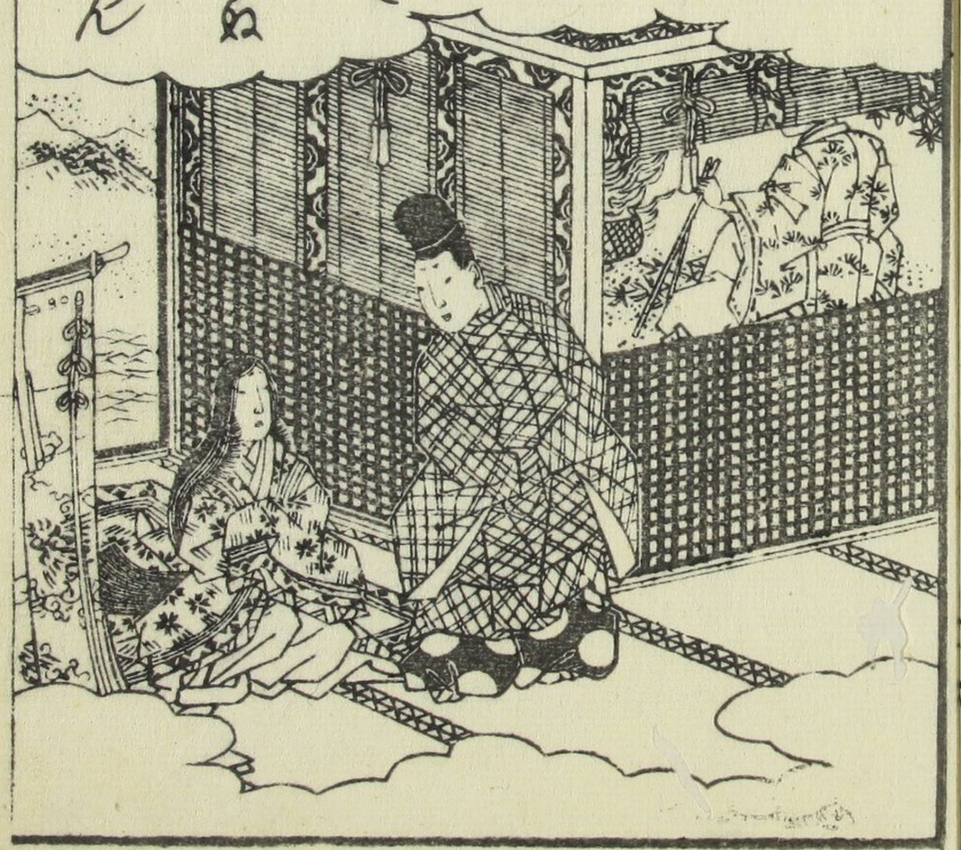


氏のある事などかと
るをきくにいとゆし
さ浦さまでど我おもふ
まゝにそゝにいらでら
おわく語らん云々
又云光源氏だうりの
人ハ此世にかりしかゝや
うをる大将のうちわ
らしを思ふべき
もなき世なり云々
又云いとゞうせんじ
となくかゝちありさ
ま相語にある光源
氏などの事にかゝせん
人を年にひとゝび
にてもうよりしたて



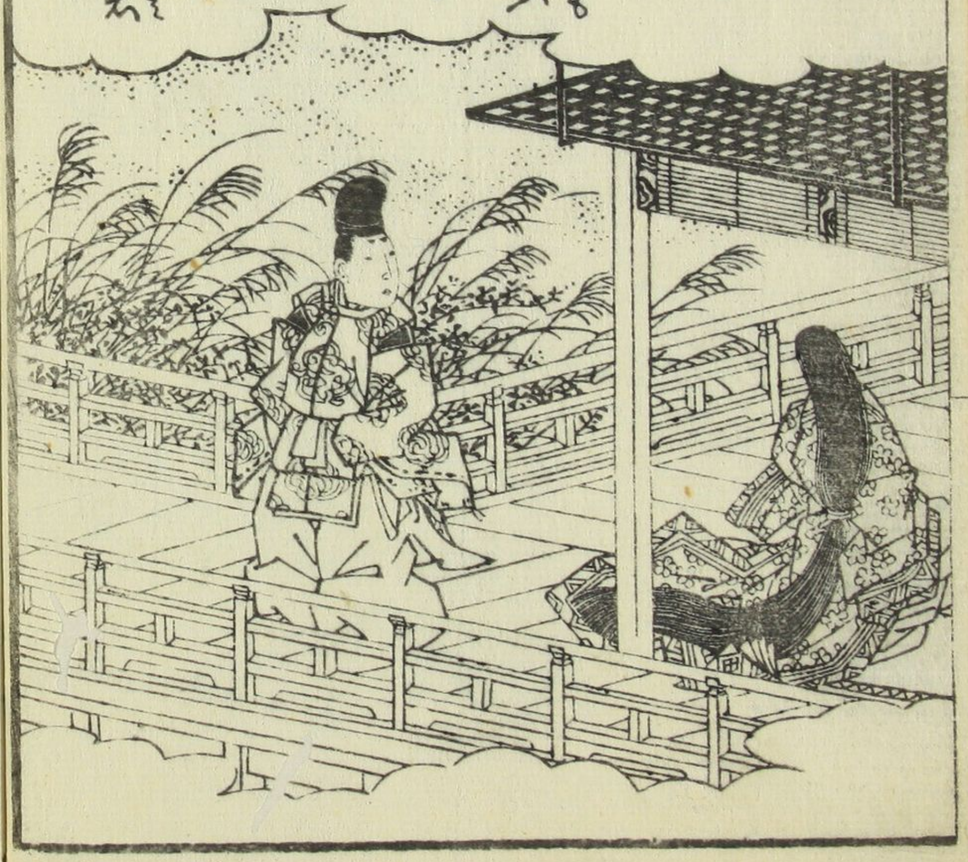
常夏（とこなつ）
なでし
この
ゆゑ
なり
しお
なれ
をつんだ
もとの
うき種を
人や
たづ種ん

まつりてうれふ国の
女君の事に山里に
かくしもあらまて
たなもとぢ月堂を
なづめていとなげそげ
にめでたうん作ふ
などをよりくまち
つゝこそせあとだう
りおもひつゞけあら
ましごとにもわが
えなり云々
又云此源氏相ぐとり
一の巻よりしてこゝな
つゝせこゝへとなのうち
にいのる云々
又云むらさきのもの



篝火（かゞりび）
かゞり
火に
こち
そふ
気の
けふり
こそ
よりハ
こえ
甚ぬ
ほのか
なるらん

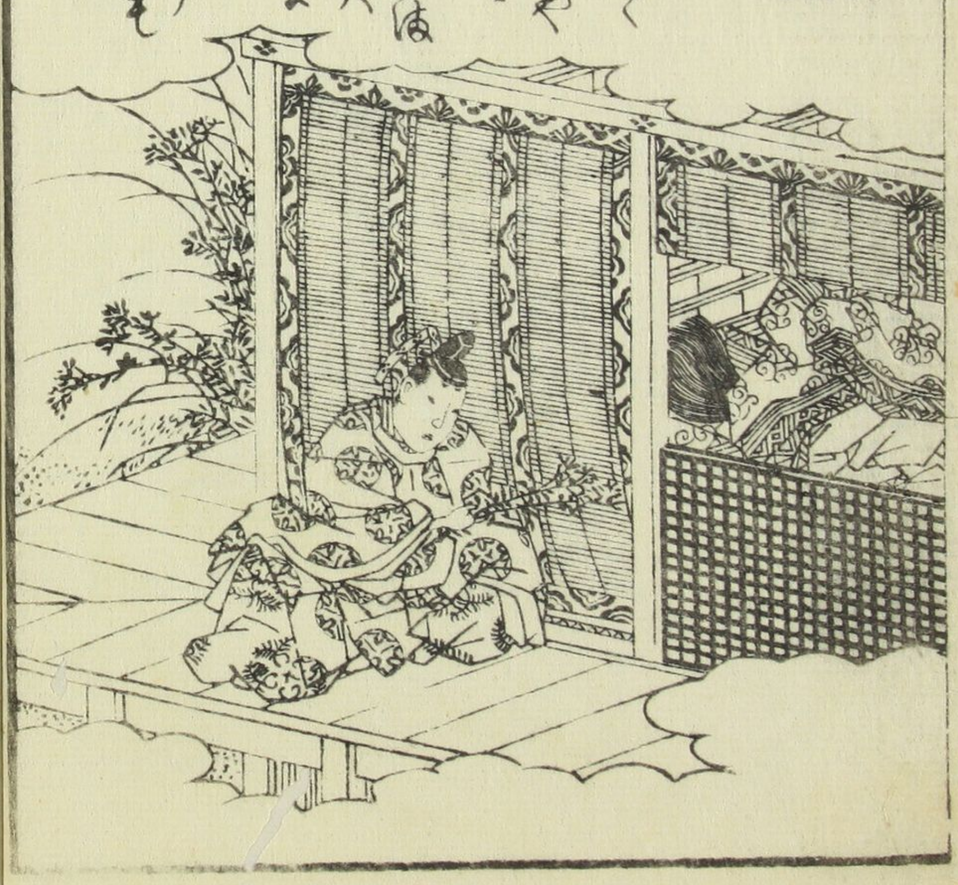
ぞくりに宮治の宮
のむまめどものゆ
あるをいうなる所な
まバそこにしもも
ませてるなるらんと
ゆうまうおもひし
ところぞうしげに
をうし紀所なるを見
ひつくからうじく
こたりてとのくたらう
所の宮治後をいうで
みるゆも浮舟の女君
のかる所にやなりんん
などまづ思ひいでら
ゑく云々
以上ふる紀ものに此



ものがたりをみめ
たるは此更科の記
たじめなるべしなに
宗の物語とも云
なづけたり
彼衣に云あり法る
小うらひつ引よせさ
せて見ひくとまやむ
りしのあとなるらん
こまバかなしとうや
光源氏ののこ見ひ
けるものをとへのこ
まハもまど出らんぞ
るにこぶらら出あつ
めて見へる名となり
けり云々

右狭衣に源氏をむ
けるは為時の俳とて
ひけるか母のつくまる
ものなまどもさころ
もとても法くりもの
がてりなまべるける
あとにしたく引用
せるか
俳案抄には狭衣の
俳者大弐の三位に
あらずといへり
按ずるに此抱がてり
称呉の子順徳院
御記を花雪餘情
に記されてり
又中山内府の水鏡

蘭
おなじのく
法ゆるや
ぬるゝ
ふぢ
だらは
あはまは
うきよ
かぶと
だらり
も



に云此式部が源氏
抱持つくり出して
侍るはさらに凡夫
の所行とはおぼえ
ず日本紀をたゞ
めとしく諸家の
日記にいふるまぐ
あきてうかにさとり
えたりとて時の人
日本紀の局と号し
侍りける云々
鴨の長明が無名抄
に云さても此をの
がてりつくりいでる
事とを思へど〳〵此
世むとのなまるぞめづ

まい木柱
いまはとて
肩かまぬ
とも
なま
来つる
ほきの
たしらよ
ことをこ
ことをる
な

らうにハおぼやとまと
とふれやらけれやーこゝ
うつきすーふやとこそ
お歌ひ書とをとより後
のものがたりハおすべ
いと世をりね巻々
まのあり書を云
く心そつくるん事ハ
源氏にまきりこえん
みきをはくり出足人
あらんやうつぎこけ
とりまとまらしうど
を物語とく成けん
こちの事八さぞありり
作りいでなん此文の
志ろまざらんハおぼ気ね

又云く
東鑑四十三に云建
長六年十二月十八日
丙戌於御所光源
氏物語事有御談
議河内守親行読之
云々
烏丸光雄卿云源
氏物語一部のことを
ハ皆哥なり句毎に
哥になるぬハなし
されバ中の院の源
氏の講釈の時烏丸
どのゝおほせられし
源氏ハ先べて哥の
注なりと云ふあり

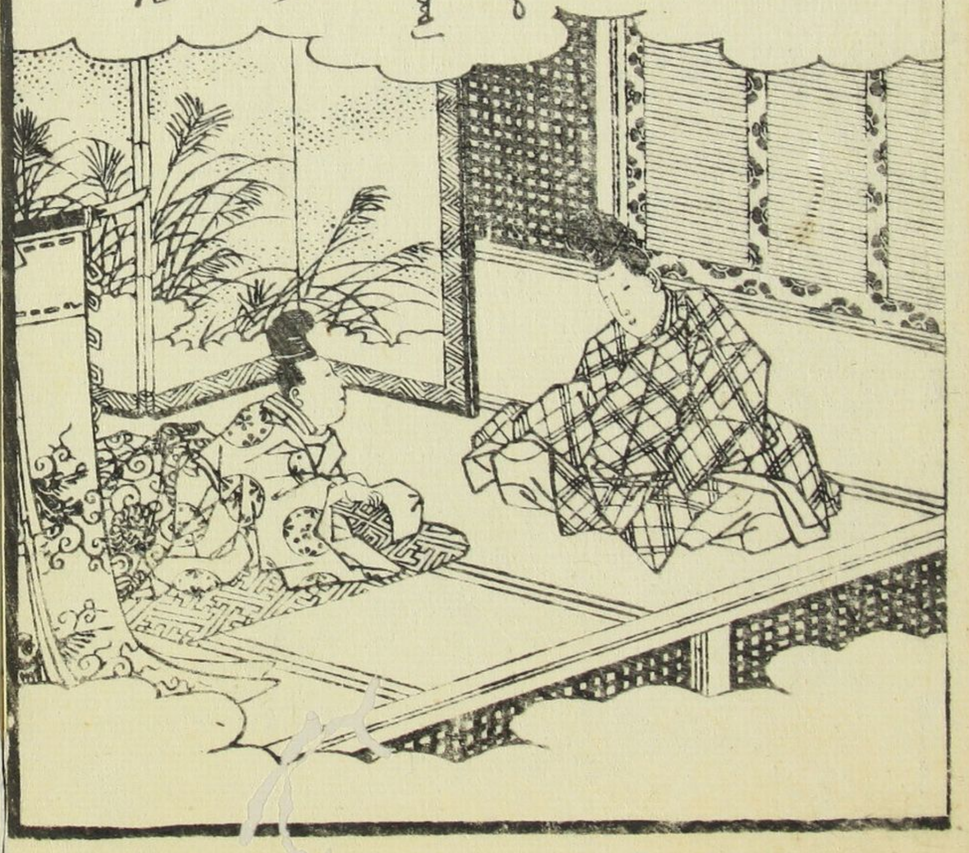
バいらにもさなりと
のこまひしよしと
云々
源氏ハ和朝の奇筆
なり去有法中の居
に文本孝庸といひ
し人因州の牧につら
へらる此人の説に有
附孝庸去有法中に
世間のたよりになる
書ハ何をも第一と仕
るべきとこゝろもさ
けまバ源氏抱説りと
こゝえたまひしに哥
学の第一のものハと
とひ給ひバ又源氏

抱説とおしへさせ
こまふ何もかも源
氏にてきゑぬるゆ
とうけなりぬ源
氏を百遍つぶさによ
こゝるものハ哥学の
成就せるなりとのこ
まひしよし孝庸が
説なりと云々
勅撰集の中にあの
ものがたりの名の出
こるハ
千載集
新勅撰集
續古今集
續後拾遺集

新續古今集
右の撰集等之
拾芥抄に源氏ものがたりの目録部立あり明石の次に浦傳ひ東屋の次に狭席等の巻ありて今のなりハ五巻多し
又十四帖のうち橋姫の巻より夢の浮橋のまゝにいたるを宇治十帖と以ふ
これハ光源氏の君かくれさせたまひしのちに御子のかをる

拘木（うはぎ）

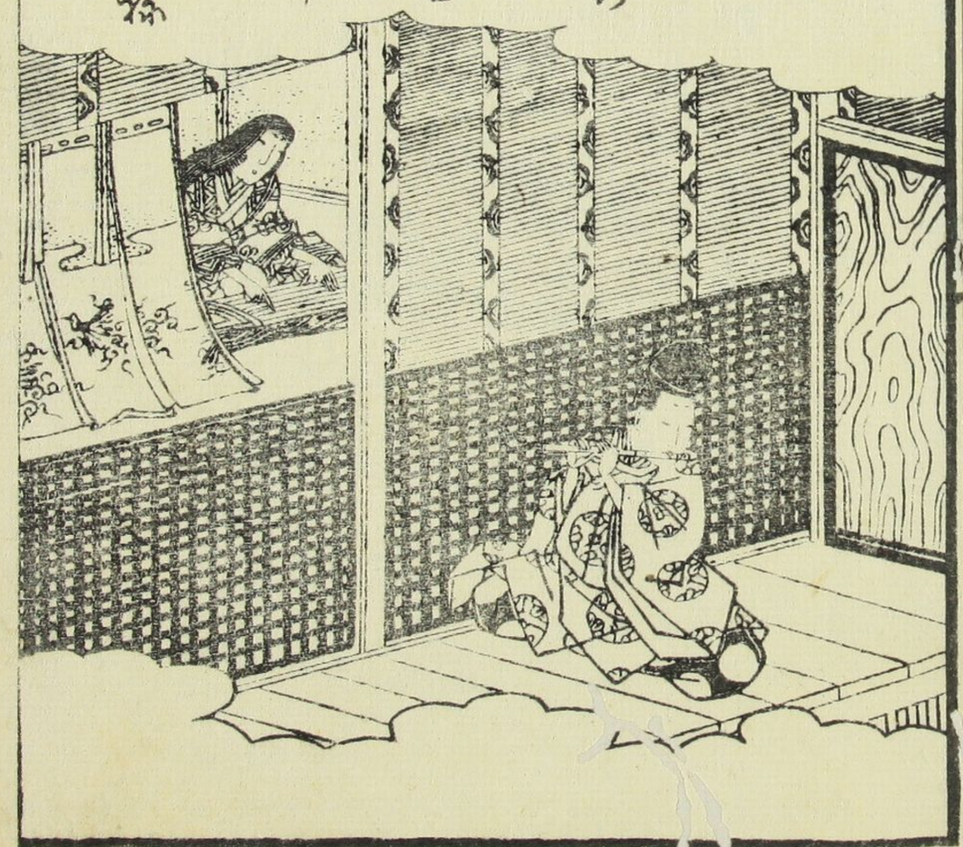
いまハとてもくんけらりもむまぶほまこえねおもひのなをやのこらん



大将宇治の八の宮の姫君にかよひたまひしおとを書けり
更科日記にも源氏ハ五十餘帖と以へりもし六十帖といひ今流布するなり雲隠浦傳狭席等の二三帖も落たるもの紀ゆきに大数をむけて六十帖といふ事を天台の六十巻に准らへたるといふハ此抱譚の中に天台教公につけてかける所

横笛（よこぶえ）

よこぶえのしらべハことにかくらぬをむなしくなりし孫こそつれ
せ孫



あるにより七台宗
にかくまりくる人の
かしこいふもの也
源氏拘謂ハおもてに
好久のあらはりを雪
らにかけども其ことに
好久の事のこゝにあ
らぬよろづの事
世々の末になりや
けば上代の英風お
とろへて俗になる是
んなをおもひにその
あらはにこゞしき
書ハ人々いとてちら
づけぬる人もくな
けれバ世にかゝまゐる

らぬをしへたりさ
かみハおもひ是ども
ことバ其くとて人
いとふむあれバその
書ひきしからぬ又
ありてもみる人も
くなれバなきにひ
としくかきおきても
そのせんなれるを思
ひまうりて志ひて
をしへがましれ筆法
をあらはさぬこゝ好
久のたはぶれとこゝに
なしてきうちに
いにしへの上蔵の英
風公ゆちひをくれ

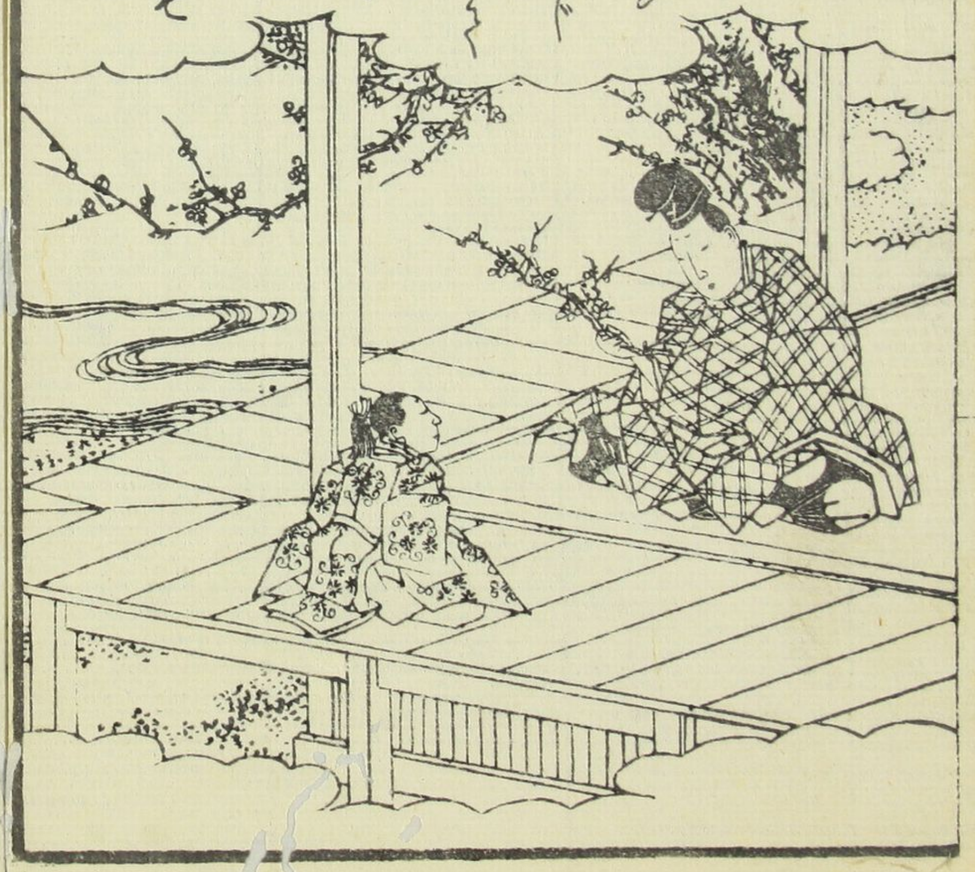
くしのこせる
ものとものとも荘
子の寓言にあるゐし
てうまをこまにひし
むかしの人の上を
今の人の子のせう
にいひもろこしの
ことを母との子と
なしくうきてるる子
ハあまどもその実ハ
こゝなしやうぜきある
子どもなり近代の
人の子をかくさん
ことに源氏の君と云
好父の人の名をかり
にたてはいりの
御法

がてりしこ
古今ものの
ことまたハその世
のみまぐとりあ
つめおかせうきてるな
るべし此式部が父為
時ハたくがく多さい
ある人にくうきて國
史をうきつぐんとく
しこぶ紀しおける
ものを志きぶが元
いぐして此物がてり
にうきなしてりこ
いてりさまバ此もの
がてりを見んものハ
好父いんらんの
幻

華[illegible]とせばさく
しやの奥玄にかを
つけて書中のよ
きるをのそみるべ
しこのこけをこゑ
まへぜしく好久の
るをおもふときハ
そん多くしく益
せくなし夫日本
王道長久なるゆ
ハ礼楽文章をう
しなハぜして俗に
おちざるをもつてこ
いにしへの礼楽文
章をみるべきにハ
此ものどもの[illegible]

白宮

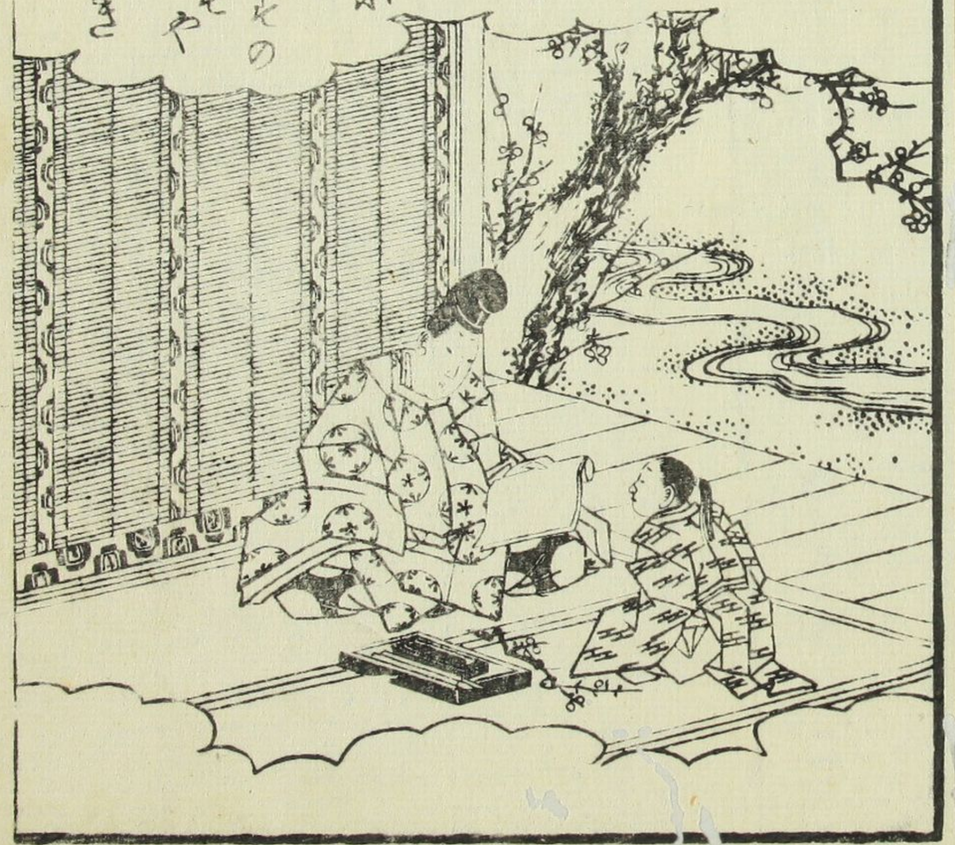
おもつ
たまに
とハまじ
いらに
しく
ちじめも
はても
志らぬ
こが
身ぞ



のことまゝ[illegible]が[illegible]
にしものがこゝりし
おいて第一にかを
清くべきハ上代の美
風なり礼のたゞし
くしてやるやうに楽
の和しくやうなる
てい男女ともに上
為らしくつゐに
雅楽をもてあそび
いやしからぬてろ
もちひなり次に
書中に人情をい
つるゆ清まびらら
なりよく人情を
志[illegible]ハ又倫の

紅梅

ありて
うぜの
ふれハ
そ
その
うめに
まり
うぐひその
とりぞ
や
ある
べき



化をしるしなふ事
多しことにかもとり
てハ國おさなら老
家もまことゝのハ
老さるにより此
物がたりにもさな
のみにかせて人
情をつくし志し
め且志せいのうつり
ゆくさまをよく志る
せり哥をもじ見
ことゞのもしまで
もさまくの人の
氣ぶりを絵ゝきて出
そがごとくゝきなら
ハせりこれ又此物

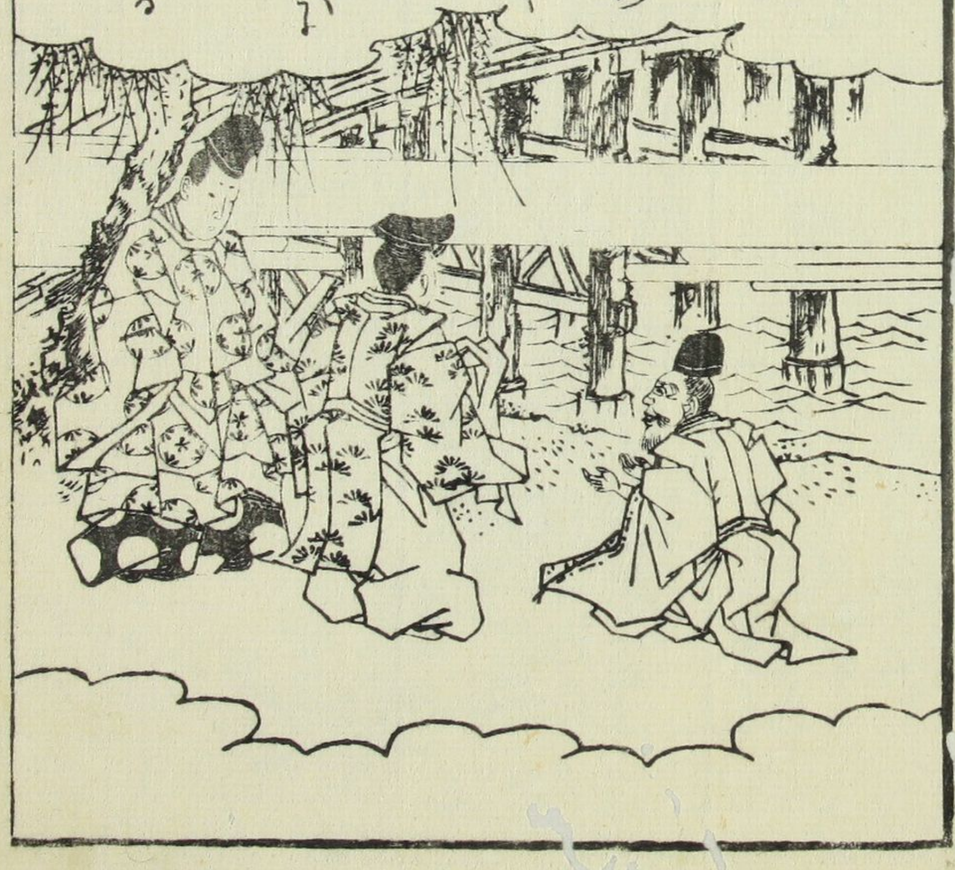
竹川

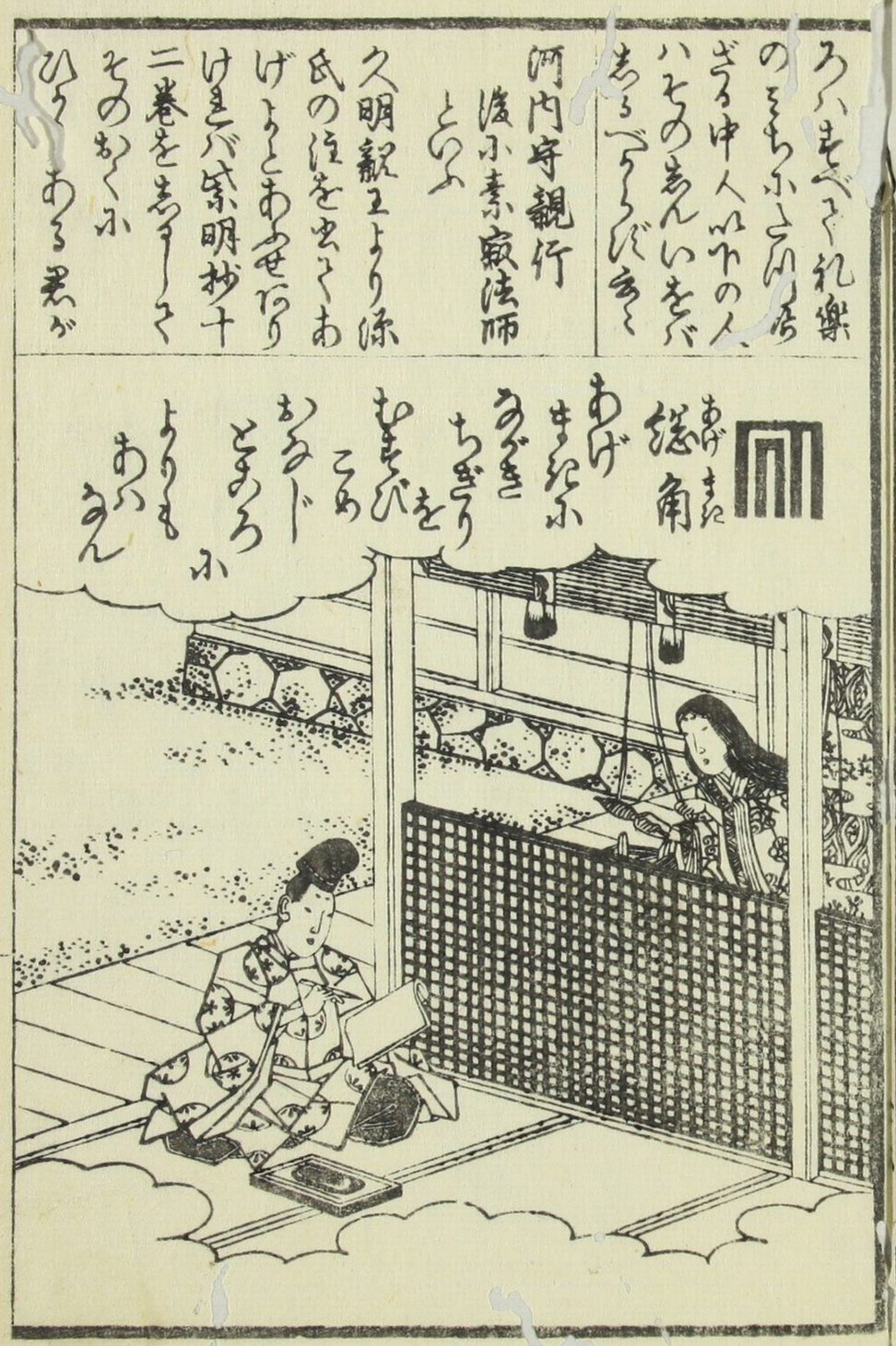
たけかハの
ましうち
いぐし
ひとふしに
ぬるき
ところの
そこハ
志り
きや

がたりにおもしく人
情をえたる所あり
ともぬなりまべて
此ものがたりハ風
化をもとゝしてかけ
中にも青柴
のこちをくはしく
志るせり東行の
あそびハ君子のさ
ざなりくさんげん
のあそびを志ら
ざるハ上藉の風
俗さまくがんぎや
うにならざるものゝ
此ものがたりハ志せ
んとこゝのこのめる

橋姫

ましひめの
ところ式
くさくさ
ごろせ
さん
さわの
志げくて
そでぬる
ぬる
ぬる





ろハまべて礼楽のこちにこれ居ざる中人以下の人ハその志んいをバ志るべからぬ云々

河内守親行
後に素寂法師といふ

久明親王より源氏の注を出てあげよとあふせなりけるバ紫明抄十二巻を志すして
そのおくに
ひらあるを

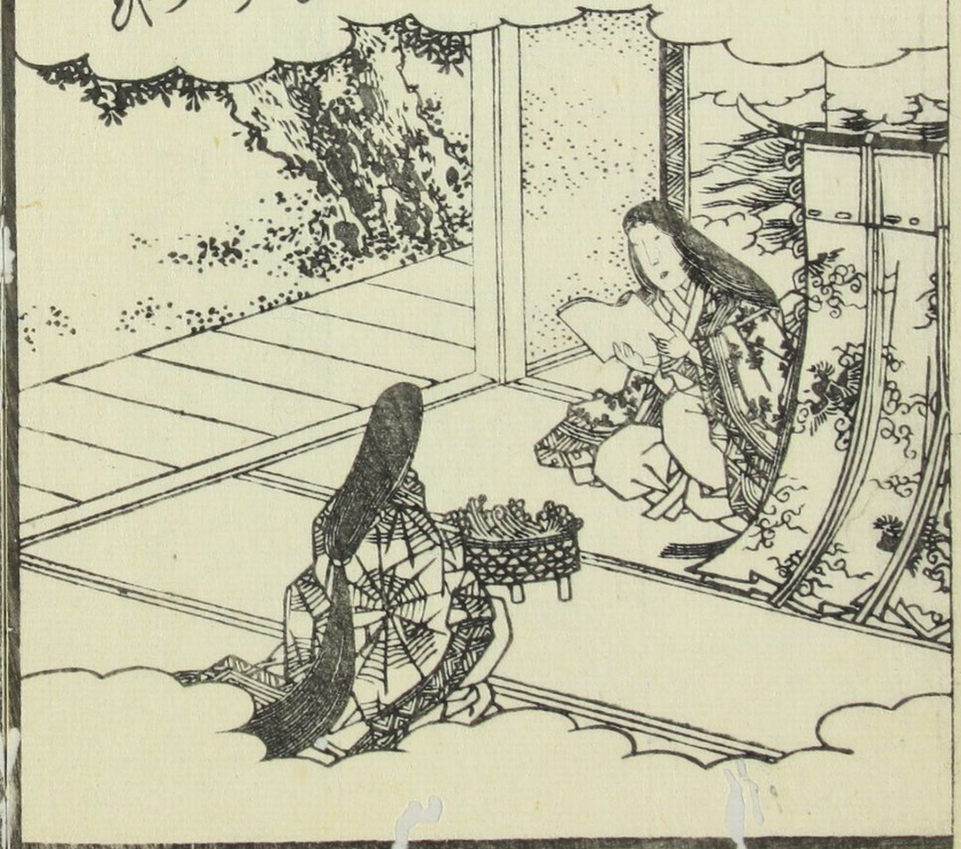
御代より
あらはれん
入江に
なげむ
和歌の
うら波

なまそめて
ほそまなな
そてぞ紫の
いろより
いでし
水くきの物と

此二首ハ光源氏と
紫の上とに なぞ
つくよむとおもえ
たり

早蕨（さわらび）

この
たるハ
こま
みせん
なれ
人の
うちに
ほめる
み祢の
さわらび

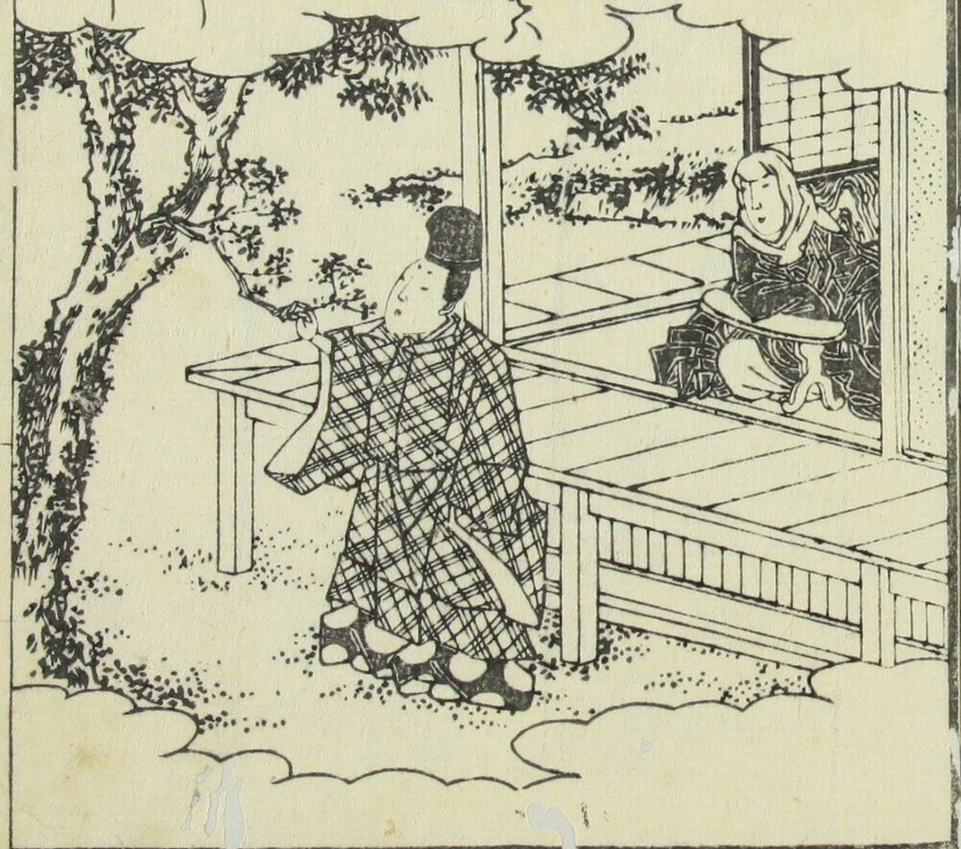


その返るかに
いらごまと
名ぞきこゆ
ひかりある
御代に
あひぬる
ほうのうら浪

あらばこそ
かにそめね
むらさきの
いろ代
あらはれ
水くきの
あと

宿木（やどりき）

やどり
きと
おもひ
いでぞハ
あの
もとの
こび
祢も
いろに
さびし
からまし



為章

むらさきの
ゆかりゆかしく
あげ称てを
粗まけ まよふ
むさしの ちら

治之

ひとゆらの
根もあらハ
むらさきの
ゆかり
まよハぬ
武蔵野の 尓

東屋

さし
とむる
むぐらや
志げき
あげ
まゝの
あまり
みどゝる
あま
そらぎ
かな

資矩

筆とりて
君が手深の
いくしれよ
桜紫の
てき浦さり
かり

源氏物語玉の小櫛

宣長

そのかたの心
あげ称て
みてまてる
まちとれ
まくる
玉の
をぐしぞ

浮舟

たち
だなの
てゞまの
及ハ
かゝら
じを
むの
うき
ふまぞ
ゆくへ
志ら
まぬ

基重

数あらで
名をさへかくも
身なほども
なげきて
志のべ
名堂の詞

師阿

さてもその
かひはなくとも
名ばかりは
世に
立出よ
和歌の
浦浪

蜻蛉（かげろふ）

ありと
見えて
見ゆ
とらまば
見えば
又
ゆくも
志らば
きえし
かげ
ろふ

宗家

法の面に
ひきまもや
ぬきん
むつまし
若宗の
弟の
せどりに
よこ人
しらば

桐つぼに
まよふん
せこも
たる
だらり
なもあこ
こぶと
つきに
いらなん

手習（てならひ）

身を
なげし
なこぐの
川の
ちゆき
せを
志がらを
かけて
なほ
とどめし

右元板文化九壬申年
再板天保八丁酉年

江戸芝神明前
和泉屋市兵衛板

雛本百人一首倭錦	女用文艶詞 寸小本
同 源氏物語絵畫	女年中祝夏ゝ姫 寸小本
同 女今川繪畫	麗玉百人一首 寸小本
同 武者錦 五冊入	女今川雲井の錦 寸小本
常磐百人一首 中本	女手ならひ状 寸小本